

# 一石三鳥の「郷土史」的研究 ～大学の新たな役割としての高齢者教育～

橋 本 武

(前財団法人日本開発構想研究所 研究主幹)

## ●「郷土史」という方法論

最近、「郷土史」という方法論に注目している。

ウィキペディアで「郷土史」を調べると、「ある一地方の歴史を調査・研究していく史学観の一つ」「現在、全国各地に「〇×郷土史研究会」、「〇×地方史研究会」、「〇×地域史研究会」と名乗る研究団体が多数存在する」「それらの会の多くは、地方大学の歴史学者が主体となり、その教え子の地元社会科教員、学生、地方公共団体の社会教育担当職員、地方博物館学芸員などが構成員となっていることが多い」などと説明されている。

その道の専門家ではないので正確な理解ではないかもしれないが、ポイントは、①歴史学の極めて限定された一分野であること、②その分野に深く関係する在野の研究者が中心になって研究されていることである。この2点を活かした取り組みは他の学問領域でも広く応用できるものと考えられる。理論と実学の境界線近くにあるような学問領域では特に有効ではないだろうか。

例えば、ビジネスマンであれば、自身が身を置く業界の歴史や現状を分析し、整理することはそれほど難しくはないだろう。むしろ大学の研究者よりもつぼを押さえた分析ができるかも知れない。ピ

ジネススクール等で行われているケースメソッドのケースの執筆も考えられる。公務員であれば自身が手がけた政策立案の過程を分析することなどが考えられる。もちろん、そのためには、一定の専門知識の習得が必要不可欠ではあるが、ビジネスや行政の現場で生きていることはかけがえのない強みになるものだろう。なんととっても、彼ら、彼女らは、はからずも長期にわたって参与観察者の立場にいたのだから。

## ●一石三鳥の「郷土史」的研究

以下では、①ある学問領域のうち実学に近い部分を対象に、②専門の研究者ではない者が行う研究を象徴的に「郷土史」的研究ということにするが、これには3つのメリットが考えられる。

第1は、その学問領域の進歩に寄与すると思われることである。上述したように、実務経験者の参入によって、様々なケースや事実関係の積み重ねが大きく進むことだろう。また、その分野の「暗黙知」が広く明らかになっていくのではないだろうか。素人考えではあるが、学問というものは単に専門の研究者がいればいいのではなく、その裾野に数多くのアマチュア研究家、愛好家が存在していることが望ましいだろう。そうした裾野が

あって始めて研究者だけでは難しい様々な素材やデータが集まり、学問の幹が太く育ち、学問が社会に普及していくものと考える。

第2は、高齢者の生きがいになると思われることである。今後加速度的に増加する高齢者。その人たちが豊かな人生を送るには何が必要かを考えると、心身面での健康、経済的な安定に加えて、知的欲求、それもカルチャースクールのレベルを超えた、かなり高い知的欲求を満足させることが必要になることだろう。「郷土史」的研究はこうしたニーズに相応しいものと思われる。同時に、自分の職業人生を客観的に振り返り、より幅広い文脈の中でその意味を掘り下げる契機にもなるだろう。「郷土史」的研究は、何よりも自分の社会経験をベースにすることができる。これほどアマチュア向きの分野が他にあるだろうか。

第3は、大学の経営にプラスになると思われることである。大学入学者が減少する中で、如何にしたら大学は生き残れるのか。現在、大学のターゲットは社会人に及んでいるが、早晚そこも供給過剰になるのではないだろうか。新たなターゲットは高齢者である。金銭的に余裕のある高齢者を大学に向かわせることができれば大学経営に大きなメリットとなる。「郷土史」的研究は高齢者を大学に向かわせるための鍵になるものと考える。

### ●高齢者向け大学院教育

そこで、「郷土史」的研究と高齢者向け大学院教育をリンクさせることが考えたい。

現在の大学院は基本的に、これから職業人生を始める若者を対象としている。

このため多くはフルタイムで大学に通学するようになっている。もちろん社会人向けの大学院も存在するが、それらも基本的には大学院修了後も職業人生を送ることが前提になっている。

これに対して、高齢者はあくまでも自分の楽しみとして研究をするわけである。職業人生に有利になるように学位をとるわけではない。したがって、フルタイムで通学することは余り望まないだろうし、講義を数多くとる必要もないだろう。例えば、週1回論文指導を受けるためだけに大学に通うような形式、ゼミにだけ出席するような形式がありえないだろうか。自分のこれまでの職業経験を活かした論文を少しずつ執筆し、うまくいったら博士論文を書く。しかし無理はしない。当然相応の授業料は支払うことになる。

もちろん、問題も多々ある。自身よりも遥かに年齢が上で、人生経験も豊富な高齢者を指導することに消極的な教員も多いことだろう。受講する高齢者には謙虚さと素直さが求められるだろう。また、週1回の論文指導でどの程度の授業料設定になるのか。さらに、「郷土史」的研究に一定の学問的価値が認められなければ、高齢者のモチベーションは低下し、先細ってしまうかも知れない。

こうした問題点はあるものの、「郷土史」的研究には大きな可能性が拓かれているように思う。様々な学問領域で取り組まれることを期待する。

注：本論は筆者の個人的見解です